

---

# 道具屋うまー

雛祭パペ彦

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

道具屋うまー

### 【Nコード】

N1871B

### 【作者名】

雛祭パペ彦

### 【あらすじ】

ある決意を胸に、道具屋経営を辞めて、新たな人生を送ろうとするオッサンの話。ブラックユーモア。

いつものように店の営業を終えたあと、道具屋のオヤジは、テレビを眺めながら、ビールを飲んでいた。

「うーうーみゅ……」

オヤジの表情は、けわしかった。

ひどく顔をしかめているところから察するに、飲んでいるビールが苦いのだろうか。

「バカな！　いまさらビールが苦いくらいで、顔をしかめたりするものか！」

ひとりごと、だった。

道具屋のオヤジは、先程から、誰を話し相手にするわけでもなく、考えている内容をわざわざ声に出して、独り言を繰り返していた。

「そう……いまは亡き先代社長の意志を継ぎ、この小さな道具屋を切り盛りするようになって、はや15年。オレは、死にももの狂いで働いてきたつもりだ」

となりの台所では、道具屋の妻が夕飯の準備を進めている。夫が、酔った勢いで三文芝居のようなセリフを喋りはじめるのは、いつもの事なので、まったく相手にしていなかった。

「オレの仕事……薬草と毒消し草だけを、ひたすら冒険者たちに売るといふ退屈な日々。あ、いかんいかん。退屈などと思っではいけない。たとえ、それが退屈な行為であったとしても、一流の道具屋たるもの、薬草と毒消し草を売る行為を、つまらないと思っではいけないのだ！」

大声で演説をしはじめたヨツパライを尻目に、妻は味噌汁をこしらえていた。それは、売れ残りの「聖水」をダシ汁代わりにしたもので、具はネギと豆腐だった。

ちなみに、この「聖水」というアイテムは、いまいち用途がはっきりしない割には、決まって薬草や毒消し草よりも高価なアイテム

なので、いつも売れ残ってしまうのだった。

「おい、そんな話はどうでもいい！」

オヤジが大声でわめいた。独り言である。

「それよりも、いまオレは、まさに人生の転機を迎えようとしているのだ！」

オヤジは、グラスに注がれていたビールを一気に飲み干すと、唐突に立ち上がり、胸を張ってみせる。

「人生の転機！　オレは、道具屋をやめて、コンビニのオーナーになる！」

8畳の茶の間に、大きな声が響きわたる。

「コンビニ経営とは、つまりフリヤン……じゃなくって、フランチャイズ……あれ、うまく言えねえ…フランチャイズ」

「それを言うなら、フランチャイズでしょ」

すっかり酔いがまわってしまったオヤジにあきれ果てながら、道具屋の妻が、茶の間にあらわれた。酒の肴　「毒消し草とエリンギのバターしょうゆ炒め」を、運んできたところだった。

「ねえ、そのコンビニの話だけど……やっぱり、私は賛成できないわ。道具屋をたたんでコンビニ経営をはじめるとは、もし、死んだお父さんが聞いたら、ぜったいに大反対すると思うもの……」

道具屋の妻のお父さん。つまり、先代社長のことである。

「けっ、先代の社長は、もう死にました……っていうか、じつを言うと、オレが毒を盛って殺したんだけどな！　うまー！」

「えっ、なんですって！」

いきなりの爆弾発言に、妻は、持っていた料理皿を落としそうになっ

た。「あ、あなた。そ、そそそそれは本当の事なの？」

いまにも泣き出しそうな顔で、妻が問いたです。

「ウソに決まってるだろ。にゃーおかしい」

オヤジが、なんら悪びれることなく即答した。これだからヨツパライは困る。

「……もう、おどかさないですよ」

「と、見せかけて」

「えっ！」

「やっぱり冗談でしたー。うまー」

「もう、やめてよ！」

たちの悪い酔っ払いに翻弄されて、妻は脱力したように畳に座りこんでみせる。

「とにかく、オレは、コンビニのオーナーになるぞ！ 薬草や毒消し草だけじゃなくて、肉まんとか、おでんとか、弁当とか、週刊少年チャンピオンとか、いろいろなもの売るんだもんね！」

そう断言したかと思うと、オヤジは、物心のついていない中学生のごとき奇声を発しながら、せまい茶の間をぐるぐると駆け回りはじめた。

「で、でも、コンビニのフランチャイズ契約って、はじめに、まともったお金が要るんでしょ？」

「契約するには、頭金として800万Gが必要だってさ！」

「アヒヤツ、と、オヤジが笑いながら答えた。

「そんな大金、どうやって工面するつもりなの？ お父さんが残してくれた遺産と定期預金あわせても、その半分にも届かないのに……」

考えてもみれば、道具屋経営で得ることのできる利益など、たかが知れている。10Gの薬草をいくら売ったところで、十分な貯金ができるはずもなかった。

「金のことなら心配するな！」

「そんなこと言ったって……」

「まあ、聞け。わが妻にして、おっぱいの小さい女よ」

さりげない家庭内セクハラをしつつ、オヤジは、ちゃぶ台の下から、金属の塊を取り出した。ちなみに、このオヤジは、小さいおっぱいが好きな、いわゆる「微乳貧乳フェチ」だった。

「おい！ おれの性的嗜好なんて関係ないだろ！ それよりも、妻

よ、聞くのだ。これは『オリハルコン』といって、売れば、グラム当たり数万ゴールドはくだらない代物だ。どうだ、驚いたか！」  
そう言って、自信たっぷり、オヤジは、オリハルコンの塊をちやぶ台の上に置いてみせる。このオリハルコンの塊は、音楽用カセットテープほどの小さなものだが、もし売却すれば、数百万ゴールドの価値があった。もちろん本物である。  
「で、でも、あなた。そんな貴重なもの、どこで手に入れてきたのよ。オリハルコンっていつたら、伝説の金属って言われてるくらい、珍しいものなんでしょ？」

目の前に札束の山を積まれたかのごとく、妻は、震えた声をだしながら、オヤジの顔を心配そうに眺める。

「臆病なやつだなー。べつに盗んできたわけじゃないさ。ウヒヤツ！」

まだまだ酔いの醒めていないオヤジが、ふざけながら、妻のほっぺを人差し指でツンツンしてみせる。

「じゃあ、ほうやって、ほんなほのほ……」

しまいには、ホッペをグリグリして遊びはじめた夫にかまわず、妻は問いただした。

「実はな……3日前にな、ある冒険者たちが売りに来たのだ。オヒョッ。こいつらが馬鹿な奴らでな、アヒヤツ、この金属がオリハルコンだつてこと知らないで持ってきたらしく、だから思いつきり買い叩いてやったというわけだ、にゃーおかしい、にゃーおかしい！」

しかも、たったの20ゴールドでな！俺って、商売うまー！  
そこまで言つと、オヤジは気が狂ってしまったかのように、大きな声で高笑いをし始めた。

「でも、でも、でもね、あなた。もし、その冒険者のお客さんが、この金属がオリハルコンだつたつて知つたら、絶対に取り返しにくると思っただけ……」

妻が、虫の知らせとも言つべき悪寒を背筋に感じながら言った  
そのとき。

「そのとおりだ」

オヤジと妻、2人だけしかいないはずの茶の間に、聞き覚えのない男の声が響いた。

「よくも騙してくれたな、道具屋のオヤジよ」

誰もいないはずの誰かに、突然、名指しされたオヤジは、高笑いから一転、笑顔を凍りつかせた。

「なに？ 腹話術？」

いま自分の身の周りで起きている不可解な現象に戸惑いながら、オヤジは真顔で、妻にたずねる。

「わたしじゃない……」

妻も、表情をひきつらせてオヤジにこたえる。得体の知れない恐怖のあまり、そう答えるのが精一杯だった。

「ぼったくる相手を間違えたようだな」

姿の見えない声がそう告げたあと、とつぜん、妻は、鼻の先あたり、かすかな風圧を感じた。

そのわずかな風圧を顔面に受けて、目を開けていられなくなった妻は、一度だけ「まばたき」をした。

まぶたを閉じて、ふたたび、まぶたをひらく。

「あ」

妻が「まばたき」を終えると、オヤジの肩から上の部分が無くなっていた。無いどころか、肉色が鮮やかな見事な切断面からは、まるで噴水のように、幾筋もの赤黒い血潮が、うつくしい弧を描きながら噴き出していた。

「くだらないことを考えなければ、死なずに済んだものを」

いまだ姿の見えぬ声が、先ほどと何ら変わらない調子で、妻の耳まで届く。

「これは返してもらおう」

声がそう告げたあと、妻の目の前に、はじめて姿を現したのは、一本の太い腕だった。頑丈そうな鎧の一部と、小手を装着しているのが見てとれた。

「本当に、バカな奴だ」

その言葉を最後に、ちやぶ台に置いてあったオリハルコンの塊をつかみ取ると、その太くたくましい五本の指は、妻の前から消えていった。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1871b/>

---

道具屋うまー

2008年11月7日07時09分発行